



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

CITATION:

雜報. 天界 1926, 6(64): 222-270

ISSUE DATE:

1926-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160526>

RIGHT:

の小影響の和は勿論すべての可能的な値を取る事が出来る。故に星辰系の形の数は無限に澤山あると考へられる。然しながら上に考へた、定常の形のみが、時間の如何に係らず常に定常的平衡に留まつて居るのである。そして他の如何なる形も時間と共に變化し再びもこの状態に還る事なく、一般に次第に定常な形に近づいて行くのである。その結果として、定常な形が段々時間が経つに従つて、あらゆる存在し得る形のうちに一番澤山になつて來、故に星辰界に存在する多くの星辰系は定常な状態のもの及それに近づいて來て居るものならざる可からずと考へられる。即ち球形及圓盤形或は少くともそれに似寄つたものである。

實際の話が、觀測によつて發見するものは、そうである。即ちすべての天空の對象、言ひすぎたゞすれば殆んどすべての天體が皆なかくの如き形をして居るのである。勿論例外はある。けれどもその数は非常に少ない。そして、定常になつて居ない例外として申す事も出来るし、或は、又以上の研究の及ばなかつた他の定常な形として考へる事も出事かも知れない。

定常型が非常に多數を占めて居る事は、宇宙間に行はれる一般的規則であつて、何も星辰界のものに限つたものではない。例へば生物界に於ても此の根本的規則が行はれて居るのを發見するのである。動物及植物のすべての種族は、嘗てはリンネが創造主によつてかく定められたものだと信じたが、單に定常な形にすぎないのである。

最後に結論して言へば、自然界に於ける定常系は自然界の一般法則を數學的統計學の方法に依つて檢査する事によつて得られる事を見出したのである。

ラプラスの假説即ち——自然界に於ける物のすべての屬性は小影響の無數の和の結果である——此の假説を應用すれば、吾人は次のやうな結論に到達するのである。即ち曰く、個體々々の各々は最も大なる公算率を有する事を證明する事の出来る状態に漸次的に近づくものなり、と

此の最も公算率の大なる状態が定常の形と一致するのである。星辰系の場合には一般的に言つて、すべての星辰系が漸次近付いて行く定常の形は二通りある。即ち球形と扁平圓盤形である。いづれの場合も密度の分希に就ては色々の可能な場合がある。

天文學者の觀測によれば、宇宙進化の此の二種の定常な形に近い多くの星辰系が存在するのである。

○會員消息 下記の兩氏は今般京都帝國大學理學部に於いて理學士試験に及第された
竹田新一郎氏(論文、彗星の物理研究)
能田 忠亮氏(同 渦狀星雲の研究)
又、次ぎの四氏は今般京都帝國大學に入學、天文學を専攻せられる筈。

荒木健兒氏(六高出身岡山縣) 山村清氏(大阪高校出身兵庫縣) 稻葉通義氏(佐賀高校出身大分縣) 森川光郎氏(二高出身兵庫縣)

○山本博士の出張 南滿鐵道會社の招きにより山本一清博士は今夏七月に滿洲各地へ天文講演のため出張せられることに決した

即ち

$$\frac{\text{太陽の直径}}{\text{地球の直径}} = \frac{1919,763}{17.614} = 108.98$$

故に、太陽は地球の約 109 倍の直径を持つてゐる。

しかるに、ヘイフォード(F. Hayford)に據れば、地球の大きさとして最も精密な値は

$$\text{地球の赤道半径} = 6378,388 \text{ キロ}$$

であるから、太陽の大きさをキロメートルで言へば、

$$\begin{aligned} \text{太陽の直径} &= 108.98 \times 2 \times 6378,388 \\ &= 1390274 \end{aligned}$$

太陽は即ち直径百三十九萬キロの大火球である。

此の一大火球を吾人は地球上から見て居て、直径が約 32' に見えてゐるのであるから、地球から太陽面上に角度 1 秒に見える長さは、實際、どれ程のものであるかと言ふと

$$\frac{1390274}{1919,63} = 724,24 \text{ キロ}$$

即ち七百キロ、換言すれば、百八十里の長さが角度 1 秒に當つてゐるわけである。若し、或る日の太陽面に直径 50' の一黒點が見えたとすれば、此の黒點の直径は 3 キロであり、又は、吾が地球の直径の三倍弱の大きさであるとも言へるわけである。

太陽が地球に比して 108.98 倍の直径の持ち主である故に、其の表面積は、地球よりも

$$(108.98)^2 = 11877 \text{ 倍}$$

だけ大きいことを意味し、又、體積は

$$(108.98)^3 = 1294430 \text{ 倍}$$

であるわけである。

○大正十五年度の京都大學天文學關係の諸講義題目

新城教授 宇宙物理學
地磁氣論
東洋天文學史
山本教授 星學通論
近世天文學史
天體物理學
太陽物理學
天體觀測第二部

上田助教授 誤差論及計算法
球面天文學
軌道論
天體觀測第一部
荒木助教授 天體力學
新城教授 } 宇宙物理學研究實驗及演習
荒木助教授 }
小野講師 }

生にして高尚なる智識があつたならば第三次の世界を想像したであらう。而してこの連続せる正方形を以てある奇態な形が第三の方向へ動くのに因るのであるといふ事を考へえたであらう。四次の物体が立方體に關する關係はまた立方體と正方形との關係の如きものである。

四次の物体が我々の空間を通過する際には常に變化する立方形に見えるであらう。その本體は立方體がその稜の長さ丈け第四の方向へ動く際に形づくるものであるに相違ない。外の形も同様な關係をもつてゐる。人類の影先生に對する關係は又超人の人類に對する關係である。

生 それで大分解りました。しかしさうしてそれが本當だといふことを證明できますか。

師 イヤその證明は出来ない。この世から第四の方向へかくれて又返へつて來た話も知らんし、四次の物体がこの空間を通過するのを見たこゝまがないんだから。

生 誰か四次の物体の圖をかくこゝまが出来ませうか。

師 もしそんな圖が出来たとしたら、それは三次の形だらう。我々が立方體や球の圖を平面にかく様なものだ。

それで四次世界の規則に従つて、三次元を有する投射圖形が出来たとしても君方から見れば矢張り四次の物体は見えないうに相違ない。それには是非共第四の方向をわきまへてゐるものでなくてはならないんだ。(をはり)

ジエレミヤ・ホロツクス

昔から『美人薄命』と言ふ諺があるが、肉體的な方面でなく、精神的な方面で、偉大なる天才にしてうら若く其の生涯を終つた人は甚だ多い。詩人や藝術家に著るしいが、科學者の中にも可なり多いやうである。佛蘭西の有名な數學者ガロワなんかもその一人である。あまりこの人の傳記については知らないが何でも二十四五で死んだと言ふ話である。彼が數學界に一時代を劃した『集合論』(Gruppen theorie)の概念は、何でも彼がまだ十七八歳の頃中學時代にノートの終りに書きつけて置いたものだと言ふやうな話も聞いた。

然し天文學界にジエレミヤ・ホロツクス(Jeremiah Horrocks)を有するは實際吾々の誇りである。古來かくの如く若死にした天才はどんな詩人や藝術家をさがして見ても其の比

を見ないであらう。ケプレルが死んだのは千六百三十年であるが、ホロツクスは其の後十年間づゝばかり生きて死んで仕舞つたのである。彼は千六百十九年に生れ千六百四十一年に二十一歳を一期として黄泉に旅出つた。然し、天文學上に於ける彼の事績は偉大なものであつた。彼は英國の天文學の基礎を作つたと言はれるが、金星の太陽面通過の最初の觀測者は彼であつた(千六百三十九年)。

彼が二十一年の生涯——と言つても十七八までは先づ子供だらうが——になした仕事には、木星及土星の運動や、彗星や潮汐に關する研究があつて、此れに依つて、天文學上驚くべき進歩をなしとげた。實際ワリス博士が言つたやうに“Had he lived what would he not have done”だ。(星見小路)

IV 白色接近聯星

V 變光星(想像的)

他の如何なる星辰進化論によるも此の五つの特性を都合よく説明する事は出来ないやうに思はれる。然るに此の理論によれば此の五つの説明は前に述べたやうに容易に出来るやうに思はれる。

第一圖の星は Russell がまつた星と同じ星である。即ち

1. Antares; 2. δ Cephei; 3. Arcturus; 4,5. Capella; 6. Plaskett 星
7. V Puppis; 8. Y Cygni; 9. β Aurigae; 10. Sirius; 11. Procyon;
- 12, 13. α Centauri; 14. 太陽 15,16. ξ Bootis; 17,18. Krüger 60.

續 星座百首 其の一

某 女

1. 北天星座
北天を 飾る星座は 二十九座
北極星を 中心として
2. カシオペア座
カシオペア 圓るは麒麟さ セフェウス座
アンドロメダや ペルセイの座
3. 駁者座
駁者の座を 取りまく麒麟 山猫座
双子座牛座 ペルセイの座
4. ペルセイ座
ペルセイ座 赤經三時に 位して
アンドロメダの 東にあり
ひんがし
5. アンドロメダ座
アンドロメ 赤經一時に 位して
北にカシオペア 南には魚
6. 三角座
三角を 圍む星座は ペルセウス
アンドロメダさ 魚と牡羊
7. 麒麟座
麒麟座は 北極星座の 一つにて
南山猫 駁者ペルセウス

8. 大熊座
大熊を 回る星座は 麒麟龍
牧夫獵犬 獅子に山猫
9. 山猫座
山猫座 東大熊 西に駁者
麒麟の南 蟹の北なり
10. 小獅子座
小獅子座の 西は山猫 南獅子
東北一帯 大熊の座なり
11. 小熊座
小熊座は 北極星を 頂きに
東西南は 龍にまこまる
12. 龍座
龍を圍く 小熊大熊 ヘルクレス
琴座白鳥 セフェウスの座
13. 北冠座
ヘルクレス 牧夫と蛇の 三つ星座
北冠の座をば圍めり
きたかんむり
14. 牧羊座
牧羊座の 南は乙女 北は龍
東冠 西は臘犬
かんむり

變光星の觀測を奨む

天文同好會 池田政晴
觀測部變光星課

もう寒さも去つて、夜星を眺めるのも樂になりました。此際諸君の觀測を御奨めする意味で、變光星の比較星の表を載せる事に致しました。いづれも古賀恒星圖で探す事が出来、六等以上ですから、肉眼又は双眼鏡で充分觀測が出来ます。觀測方法は「天界」十號に山本氏の文があり、二十一號、二十二號に中村氏の文があります。

今月は δ Lib と β Lyr を載せました。これから時々適當な星を選んで載せる積りです。これまで中村氏が天界に載せられたのを記せば、

β Per 33號	311頁	R Sct 30號	196頁	U Ori 26號	62頁
δ Cep 33	310	o Cet 37	63	T Cep 29	160
R CrB 28	127	R Lep 27	94		

觀測記録は總て丁寧に保存し、寫を觀測部宛送つて頂きたい。毎月の豫報に非常に役立ちます。天象欄の豫報は私が β Per と δ Cep を觀測して改正した以外かなり古い觀測から推算して居るのであるから熱心家の助力を得て之を改正して行きたいと思ひます。

δ Lib (てんびんのデ) 星のために

μ	Lib	5.4 等	ϵ	Lib	4.9 等
13	〃	6.1	ζ	〃	5.6
ξ^2	〃	5.7	37	〃	4.8
ν	〃	5.4	γ	〃	4.1
o	〃	6.1			

β Lyr (ことのべ) 星のために

2	Her	3.9 等	o	Her	3.7 等
u	〃	3.5	α	Lyr	4.3
9	〃	4.0	δ^2	〃	4.5
ξ	〃	3.7	γ	〃	3.3
ν	〃	4.3	η	〃	4.3

◎日本光學工業會社に於て製作中の「二十吋」反射望遠鏡

先年平和博覽會に出品せられた同望遠鏡は未完成製品であつたから其後反射鏡の根本的磨き直しを爲す事となり爾來三年間に互り獨逸人技師「ザットラー」氏日本人技師近藤徹氏其他之に没頭し先づ「テストプレート」として六十糎の大平面鏡を完成し之に依り試験をしながら反射鏡の研磨を續け段々完成に近づい

て二重星に依る最後の「テスト」を爲すため此頃同社の假ドーム中に赤道儀装置は全く組立てられて居る。

二月二十七日には新城博士は詳細に之等を見分せられた。此の日本第一の大口径望遠鏡が學界に提供せらるゝ日の一日も早からんことを希望する次第である。

天 文 時 評

太陽の黒點が肉眼でも見える

(三月七日大阪朝日朝刊)

京大の天文學者山本一清氏の發表するところによれば、近ごろ太陽面の黒點はますます明瞭となり、立派にわれわれの肉眼でも見られる、多分今週中は同様見えるであらう。

評——去る二月二十五日太陽東邊に現れた黒點群(三澤氏の第385群)が、三月に入つて太陽の中央子午線に近づくと共に頗る大きな形になつて來た。三月二日午後五時頃、京都大學の山本上島其他の諸氏は之れを日没前に肉眼でも見た。それで山本氏は此の事をニュースとして大阪放送局へはがきに書き送つたものである。大阪朝日が之れを七日の朝刊に出した時には既に此の黒點群は可なり西へ移つて了つてゐた。

お星さんが晝間見えた

(三月十七日大阪毎日新聞夕刊)

十七日正午頃から午後一時頃にかけて太陽の近くに星のまたゝくのが發見されたが白晝しかも強い太陽の光の中に星の見えるのは珍しいことなのでいづれも不思議に感じて大騒ぎをやつてゐる東京天文臺について尋ねる。

評——それは決して不思議なことではなく星は金星で平常は太陽の光に消されてゐるが、今は金星が非常に光度を増してゐるので太陽の光に打勝つた譯だ、年々一度は金星が光度を頂點まで發散する今年は三月十四日がその光度の高い日であつたが十七日は空が晴れたのでよく見えた譯である。

地球自轉緩む

(三月十七日大阪毎日夕刊)

シカゴ大學のブラウン教授は多年の實驗により地軸を中心とする地球の自轉は漸次緩慢になつて行くがそれは全く氣につかぬ程のもので百年に約十分の一秒の割合である最近廿年間の計算

による此の原因は潮の干満による磨擦から起こるのでこの中心地點はペーリング海峡であることを發表した。

評——地球の自轉が緩むか速まるかは天文學上興味ある問題である。多くの學者が實測的にも數理的にも研究してゐるが、大體に於いて未決定となつてゐる。實測的と言へば日食や月蝕の記録を精密に調査研究するのであるが、此の方面から今までに確證は得られてゐない數理的には、地球が收縮して行くため自轉は速くなるといふ理論と、月との潮汐關係のため自轉は緩くなるといふ理論とが共に成立するのであるが、結局何れが重要なものであるか分らない。此の記事は、多分潮汐問題の研究結果の發表であるらしい。しかし左様なれば要するに數理上の結論である。實測學派の人々が承認しない限り、餘り早合點ばつゝしなければならぬ。

通 信

山本先生

(前略) 丁度十四日に日食が有るために、十四日までは家から通學致して居りました。

(中略) 天界一月號と東京天文臺の本曆によりまして日食の時期を豫知致しました。

私は、早速、寫眞の三脚に双眼鏡(12倍)を取付けました。そして太陽の像を投影する白紙板を用意し餘計な光線を避けるplateを作りました。それから大阪の大會の時上田先生の御講演noteより見出しまして、烟ガラスを作りました専門的な準備は出来ませんがこれ位準備しておきました。愈¹⁴日が参りました。クロノメーターが有りませんでしたから學校の歸り道に大阪中央郵便局で最も正確と思はれる程度に時計を合はせました。歸宅後再び郵便局に時間をお合はせました。

天文學を知らない母や弟、續いて妹までが二階のヴェランダへ登つて來ました。さあ今か今かと思つてゐるさ16時21分4心持缺けた様になりました。父は私の作つた烟ガラスでしきりに見てゐます。私は白板に太陽の像を投射致しました。すんずんさ缺けて参ります母は「何うして天文學者はこの時間を少しの間違ひなしに豫知し得るのか?」等と問ひます。そこへ姉までやつて参りまして大さきで御用いしました。幸にも一點の曇りもなき青空に不完全ながら觀測して4時55分には太陽は西の靄の中にかくれてしまひました。

(後略)

小泉功

「教材としての天文學」講義 要項

(去る二月中旬京都にてせし天文講習)

一、科學的教材として

甲、天象の觀察

イ、星座と其の運行

- 1、星 座
- 2、日 週 運 行
- 3、年 週 運 行

ロ、諸遊星の運行

- 1、月の運行と盈虚
- 2、内遊星(水星、金星)
- 3、外遊星(火星、木星、土星)
- 4、彗星の運動

乙、天球上の諸現象

イ、天 球

- 1、兩 極 と 兩 點
- 2、分

ロ、晝 夜

- 1、日 の 長 短
- 2、時 刻
- 3、時間(太陽時と恒星時)

ハ、四 季

ニ、太陽の運行

- 1、太陽の運行法則
- 2、季 節

ホ、日食と月蝕

- 1、日 食
- 2、月 蝕
- 3、掩 蔽
- 4、遊 星 現 象

ヘ、曆

- 1、太 陰 曆
- 2、太 陽 曆
- 3、太 陰 陽 曆

丙、天體の物理的考察

イ、宇宙引力

- 1、重 力
- 2、落 體 の 運 動

ロ、天體の運動

- 1、遊 星 の 運 動
- 2、彗 星 の 運 動
- 3、流 星 の 運 動

ハ、天體の形狀と自轉

1、地 球

2、月

3、太 陽

ニ、潮 汐 作 用

1、潮 汐 現 象

2、潮 汐 の 影 響

ホ、光 と 熱

1、光 の 進 路

2、光の反射——遊星の表面

3、地 球 の 光 輝

4、色

5、ス ペ ヲ ト ル

6、太 陽 熱

丁、宇宙の構造

イ、地 球 世 界

1、地 球 の 形

2、球 形 の 證 明

3、地 球 の 大 き さ

4、經 緯 度

5、緯 度 測 定 法

6、經 度 測 定 法

7、航 海 と 旅 行

8、重 力

9、地 球 の 構 造

ロ、太 陽 系 統

1、太 陽 系 の 構 造

2、太 陽 系 の 大 き さ

3、太 陽

4、諸 遊 星

5、月 と 諸 衛 星

ハ、恒 星 宇 宙

1、恒 星 の 距 離

2、恒 星 の 運 動

3、恒 星 の 質 量

4、宇 宙 の 構 造

戊、天文用の器械

イ、望 遠 鏡

1、屈折式と反射式

2、固定式と運轉式

3、天體寫眞法

ロ、時 計

1、柱 時 計

- 2、懐中時計
- ハ、日時計
- 己、數理的考察
 - イ、算術の諸問題として
 - 1、天體の距離と大きさ
 - 2、曆時の計算
 - ロ、幾何學の諸問題
 - 1、天體の形狀
 - 2、太陽系の構造
 - 3、晝夜と四季
 - 4、月の盈虚
 - ハ、數理物理の諸問題
 - 1、光熱の比較
 - 2、引力の計算

二、人生一般のために

- 甲、常識としての天文学
 - イ、地學の擴張として
 - ロ、觀察科學のモデルとして
 - ハ、精密科學のモデルとして
- 乙、藝術對象としての天體美
 - イ、光輝の美
 - ロ、形象の美
 - ハ、運行の美
 - ニ、望遠鏡裡の天體美

- ホ、藝術活動としての天文学
 - 1、天文家の生活
 - 2、天文台の生活
 - 3、觀測の技巧
 - 4、數理天文学の魅力
- ヘ、
- 丙、人生哲理としての天文学
 - イ、生活原理の暗示として
 - ロ、本能としての宇宙觀
 - ハ、認識論の立場から
 - ニ、文化史としての天文学史
 - ホ、迷信の素材としての天文学
- 丁、趣味としての天文
 - イ、個人的趣味
 - ロ、社交的趣味
 - ハ、旅行者の趣味
- 戊、實生活のために
 - イ、時刻
 - ロ、方位
 - ハ、精密位置
 - ニ、日光利用法
 - 1、光線の利用
 - 2、夏時法
 - ホ、天文旅行術

山本曰はく——

現今、中等諸學校が天文教材の取捨及び取り扱ひについて迷つてゐるに反し、小學校では既に多くの天文教材を採用し、小國民たちの心に大宇宙の消息を傳へることに着目せられたのは吾人の注意すべき事である。去る二月中旬、自分は京都市内の小學教育者たちの求めに應じて、上記の講義をした。本講の要目は先づ純學術的見地から天文教材の分析を配列したのであるから、現在の小學教科中には此の見地から見て缺けてゐる部分が少なくない。——とにかく、小學と言はず中學科と言はず、一般に此の要目の配列に従つて天文教材を撰擇せられたら最も適當であらうと自分は信ずるから、世の教育者ならびに文部當局の一顧を希望する次第である。

春と夏の星々

C. N. ホーラムス

冬の間は、夜の第一の輝星シリウスと、第五の輝星カペラとが暗い空を飾るが、春の季節には、第四の輝星ゾーガと、第六の輝星アークトゥルとが其れに交代する。此の頃の夕刻には、アークトゥルの方がゾーガよりも空に高い。しかし、ゾーガの青い光りが夏にもなれば子午線の中で殆んど天頂にまでも来るのに、アークトゥルの方は天頂には達しない。黄金色のアークトゥルの光りが「春の先き觸れ」と呼んでも好かるう。へび、かんむり、ヘルクレス、りょうおほくま、おとめの星座たちに圍まれた天空の、まきを座の下部に此の星は位置を占めてゐる。北斗の劍先き、南東の方へ自然に延びた所になつてゐるので、アークトゥルのこの輝きを見つづけるのは容易である。

まきを座のアークトゥル星に就いてはいろいろと興味深い事が思ひ出される。まづ第一に、アークトゥルは、毎秒一百マイルといふ大速力で、吾が世界の方へ一目散に飛んで來つゝある。しかし、何しろ此の星が吾々から二百兆マイルも遠く距たつてゐるので、吾々は此の星が吾が地球と間もなく衝突するなどと心配する必要は無い。アークトゥルは實に巨大な太陽で、其の直径は吾が太陽の三十倍もある。だから、誰でも既に豫期してゐることだろが、吾が太陽は決してアークトゥルと比べられる程輝かしいものではないのだ。若し吾が太陽が、アークトゥルと同じ遠距離——二百兆マイル以上の遠方から——地球を照らすならば、それは此のまきの星座の大將星の、八十五分の一の光りに輝やくに過ぎない。

(ニウトン町にて) 或る年の五月八日

同好會々報

○岡山總會 岡山に於ける總會は去る四月十、十一兩日開催されたが、其の詳細報告は次頁に。

○東京支部第一回報告

(會員 淺野俊雄)

本會東京支部は昨年十一月七日山本教授御臨席の下に開設されて以來日尚淺く僅に五ヶ月を経たるのみであるが支部幹事五藤齊三氏の非常なる努力により順調なる發展を遂げ當二月末日迄に行へる事業は次の通りである。

一、支部開設

以來幹事宅にて毎週土曜日の夜談話と觀測の會を開催する事十六回に及べり。毎回の出席者は皆熱烈な星の愛好者であるが一月三日金星の最大光輝を觀測すべく正午過より夜に亘

りたる會合に十三名の出席ありたる外從來の出席者が概れ少数で甚だ遺憾であつた。今後は各位の奮つて御出席あらん事を祈る次第である。

(二)當支部は具體的活動の第一歩として去る一月、二月に亘り、上野不忍池畔に於て開催された東京日々新聞社主催の「こども博覽會」にて、天文智識普及の爲に天體望遠鏡により折柄活動期に入れる太陽を一般入場者に自由に觀望せしめる事を計畫し、日本光學工業株式會社の援助もあり二月一日より、十四日間幹事、五藤氏會員小島中佐淺野、吉富の諸氏會場に出席し、80耗三臺、110耗一臺を以て、日々太陽黑點を觀望せしめ、本會の宣傳を兼ねた黑點説明書三萬枚を印刷して、觀望者其他に配布し、場内發行の「コドモ日々」には五藤幹事の「お日様の話」と云ふ小供の爲の記事を掲載した。十四日間、曇天の三日を除き十一日

間、日々觀望者平均九百人總數大約一萬人に及ぶの好成績を以て、十四日大成功裡に終了せるは、支部員一同欣快に堪へざる所である。終りにこの催しに對してあられたる、東京日々新聞社藤村松之助氏の御盡力を深謝致します。

○大牟田支部幹事より

山本一清先生

古賀 和吉

拜啓申譯のない程御無沙汰を致しました何うぞ惡からず許して下さい

日下私は大牟田市制等に引き出されて世話のゴタゴタなどに巻き込まれて頼む會の事も御世話が出来ませんでした

會員名簿を見まして當市の會員の減じ様が餘り甚だしいのに驚きました是非松田君や坂本君などご共力し

て今少し天文熱を引き起したいと思つて居ます。

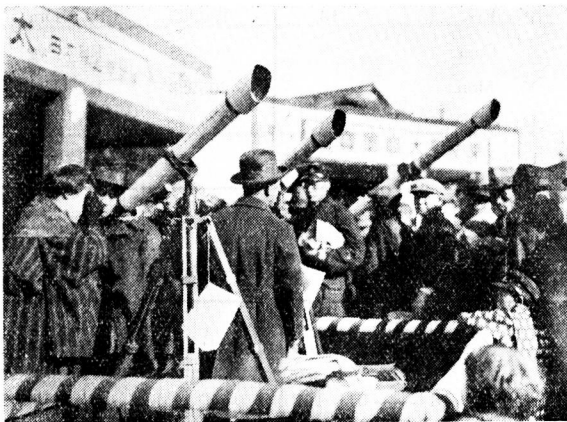
丁度本年七月より當市の學務委員になりましたから至極都合が好いのであります

其れから古賀恒星圖の原判は私が持て居りまして無用でありますから同好會へ寄附致します其れで誤まりの處を修正して御安く發行して下さい修正するには何にも手間も掛りませぬ又原判さへあれば後は至極安價に出来ますから會員諸氏の爲めに右御引受下さい。明日小包郵便にて送ります。十二月七日

○山本博士の各地歴訪 去る三月末より四月始めにかけて外務省の廳托事務のため山本一清博士は東京から九州までの諸所に出張されたが、其の機に

3月28日	横濱	4月5日	大牟田
4月6日	福岡	4月7日	下關

の各支部を歴訪せられた。



東京「こども博」での太陽觀察

○岡山の總會——報告

本誌の前號に豫告した如く、去る四月に岡山で本會の定期總會が開かれた。プログラムは殆んど全く豫定の如く進められ、先づ

四月八日は、津山町で、

午後二時から高等女學校に於ける山本博士の講演——約六百の女學生を主とした會合で、題は「天文の興味」であつたが特に、米國ハーヴァード大學天文臺に於ける婦人天文家たちの事が説き加へられた。

午後七時から津山基督教圖書館内で講習會 山本博士の「應用天文學」——集つた人々は四十名ばかり、主に教育家などの智識階級であつたが、會後、屋上で7センチ機により土星其他を觀望した。

四月九日は、倉敷町の旭町小學校で

午後二時から講演會、始めに水野千里氏の「天文臺は何ぞや」、次いで山本博士の「天文學の今昔」があつた。集まつた者は約三百であつた。此の會の開會に先立ち、同地の原澄治氏(本會々員)の寄附金によつて新天文臺が建設せられることが決定し、從つて其れが水野氏によつて公表せられたのは會衆一同の驚きであつた。——會後、有志の人々は同地内の天文臺建設豫定地を見分した。

さて、いよいよ

四月十日からは中心が岡山市の市立商業學校内に移つて

午後一時から第四回岡山講習會、山本博士の「太陽は何ぞや」が開講せられた。聴講者は約三十名。

午後七時半からは大講演會で、まづ水野千里氏の「東宮殿下と天文學」、次いで荒木理學士の「科學者としての日本人」、終りに、病氣のため出席見合はせなかつた上田理學士の代りに山本博士が臨時に天文幻燈畫の解説をせられた。會する者約三百。其の後、水野中村諸氏の指導で天體觀望が催された。

四月十一日には

朝早くから「天文展覽會」が開かれ、多くの天文圖書、器械、見本等が陳列せられた。

午前八時から昨日の講習會の續講があつ

たが、正午少しく前に終了。

午後一時半からは總會が開かれ

1. 會務報告(山本幹事)
2. 會計報告(竹内氏)
3. 新事業の計畫協議——近く同好會の名を以つて建設すべき倉敷天文臺と藤村(大坂)天文臺に關する協議、及び「天界」編輯に關する意見交換があつた
4. 決議案としては、本會規則第七條第一項により原澄治氏を、又同第二項により西岡永太郎氏と見元了氏を、又同第三項により東京天文臺長平山信博士と水澤緯度觀測所長木村榮博士をなづれも名譽會員に推薦すること、又次期の定期總會開催地としては神戸、東京、臺灣の三地が提唱せられ、殊に臺灣からの要望は極めて熱心であつたが、決局は其の取り決めの幹部に一任することにした。尙、此時東京支部の代表者によつて、「天界」が東宮御殿に献上せられる手続きが順調に運びつゝあることが一同の感謝の内に報告された。
5. 規則の改正は、第三條、第四條、第五條に加へられ、又第十條は廢された(別頁參照)
6. 幹部の改選は、決局、全部重任となる。

午後四時半から笹岡亭で晚餐會。

午後八時から學術講演會。まづ中村要氏が「天體望遠鏡とその製作法」特に反射鏡面の作り方を熱心に講演せられた。ついで山本博士の「人生哲學としての天文學」があり、十一時閉會した。

○倉敷天文臺の建設 別項記載の如く

今回いよいよ岡山縣倉敷町に天文同好會の第一號天文臺が建設されることが決定した。器械は多分カルザーの82センチ反射鏡を主とする筈。其の設計、設備、地點、經營方針及び同好會員の特典等は追つて本誌上に發表せられる筈。建設委員は當分の内、山本一清、水野千里、原澄治の三氏である。

○藤村天文臺の計畫 大阪市外に居住

される藤村義正氏の特志により、本會の第二號天文臺が大阪附近に建設せられることが確定した。器械としては50センチ級の反射鏡又は30センチ級の屈折鏡が主となる筈。建設委

員は當分のうち山本一清、藤村義正、百濟敦猷、吉岡哲夫、宮森作造の五氏である。詳細は追報。

會計報告(大正十四年度)

收 入	
會費收入	2970.04
出版物賣上高	743.34
觀測部費收入	44.50
廣告料	111.90
寄附金	71.00
繰越金	399.035
計	4339.815
支 出	
備品費	0.75
消耗費	10.74
雜誌印刷費	2226.46
出版費	462.78
原稿料	144.00
事務費	929.23
計	3773.96
差引(大正十四年末現在)	565.855

急 報

本會の幹事山本一清博士は大阪放送局から「天體宇宙の構造」と題する講演を連續放送されることとなつた。夏の星空を迎へる準備として、又、今の時世に應ずる天文学の教科書が無い今、ちようど此の缺陥を補ふ意味で天文学全般にわたる基礎的智識として、會員たちの聴講を望む。

大 正 十 五 年

四月十八日	星 空 の 外 觀
四月廿五日	天 體 の 運 行
五月 二 日	天 動 か 地 動 か ?
五月 九 日	太陽系の構造(其の一)
五月十六日	太陽系の構造(其の二)
五月廿三日	太陽系の過去と未來
五月三十日	恒 星 へ の 距 離
六月 六 日	恒 星 界 の 諸 運 動
六月十三日	恒 星 界 の 物 理
六月二十日	大 宇 宙 小 宇 宙

日は皆日曜で時間は午前十一時十分から。但し四月二十五日だけは午後七時二十分から

1926年4月13日

天文同好會

天文同好會規則

(大正十五年四月十一日改)

- 第一條 此ノ會ヲ天文同好會ト云フ
- 第二條 此ノ會ハ天文学ノ了解ヲ進メ兼ネテ同好者相互ノ親睦ヲ増スノガ目的デアル
- 第三條 本部ヲ京都市吉田町京都大學天文臺内ニ置キ、又會員密集ノ地ニハ支部ヲ置キ事ガアル
- 第四條 此ノ會ハ其ノ目的ヲ達スル爲メ次ノ事業ヲ行フ
- 一、講演(例會毎月一回、總會年一回、其他臨時會)
 - 二、講習(各地ヲ臨時ニ開ク)
 - 三、雜誌圖書ノ出版(雜誌ハ月一回會員ニハ無代配布、圖書ハ隨時)
 - 四、實地觀測
 - 五、天文臺の經營(會員ニハ特權ガアル)
- 第五條 此ノ會ノ目的ニ賛同スル者ハ誰デモ會員ニナレル
- 但シ會費トシテ毎月金五拾錢ノ割デ、成ルベク半年分又ハ其ノ倍數ヅツテ前金ヲ納入スルコト若シ一ケ年分前拂ナラバ金五圓ニ割引スル
- 申込ノ際ハ住所職業生年ヲ記入セラレタイ
- 第六條 本會ノ經費ヲ支持スル趣意テ毎年金貳拾圓以上ヲ齎出スル者ヲ維持會員トスル
- 第七條 一時金壹百圓以上ヲ寄附スル者及ビ會員五十名以上ヲ紹介シタル者及總會ニテ特ニ推舉セラレタ者ヲ名譽會員トスル
- 第八條 此ノ會ノ幹部ハ次ノ通り
- 幹 事 三名 會 計 一名
- 此ノ幹部ハ總會テ選舉セラレル者デ任期ハ一ケ年
- 第九條 此ノ會ニ評議員若干名ヲ置キ、幹部ノ相談相手トナル

天文同好會大正十五年度幹部

幹 事	山 本 一 清
同	上 田 穰
同	荒 木 俊 馬
會 計	竹 内 忠 治